

京都大学新聞 2011年9月16日(金)号

教員の薦める本

「暗黒星雲」

フレッド・ホイル著、鈴木敬信訳

法政大出版局(1974年)

これは驚くべき本である。ホイル (1915-2001) は恒星進化論、宇宙における元素合成、宇宙論などで活躍した 20 世紀を代表する理論天文学者の一人。ガモフのビッグバン宇宙論に対抗して定常宇宙論を提唱した。ちなみに、「ビッグバン」というのはホイルの命名。宇宙は超高温超高密の火の玉から始まったというガモフの説を揶揄して、宇宙がそんな「ビッグバン」から始まったなんて信じられるかい? という文脈で使われたらしい。しかし、結果的には素晴らしい命名だった。このようにホイルには文学的才能があるようだ。本書も、そのホイルの文学的才能の賜物である。内容紹介が遅れたが、この本は SF である。それも驚くべき内容だ。独創性豊かな理論天文学者ホイル先生はさすが、とプロをうならせた SF。いや、プロでなくても、まだ大学生だった私は、いたく感動した。多少ネタばれになるが、さわりを少し紹介しよう。

ある天文学者がある日、奇妙な暗黒星雲を発見した。暗黒星雲とは、星間空間中で星間ガスが濃密に集まった領域のことである。あまりに濃密なので背景の星が隠されてしまい「暗黒」に見えるのでこう呼ばれる。この暗黒星雲のどこが奇妙かという、どうも地球に近づいているらしい。距離と速度を測ると何と数年で太陽系まで到達しそうである。暗黒

星雲が太陽系に来たら、太陽を隠してしまうので地球は寒冷化して人類滅亡の危機だ、というわけで地球はパニックに陥った。ところがさらに奇妙なことが発見された。電波を暗黒星雲に送ると電波が跳ね返ってくるのだ。しかもただの反射ではない。どうも暗黒星雲が返事をしているようなのだ！色々調べると驚くべきことがわかった。暗黒星雲は知能を持っていたのだ。生命だったのだ！？地球人の運命やいかに、、、？

暗黒星雲が生物の一種、という発想には、どきもをぬかれ驚嘆した。そして、とてつもなくおもしろかった。生命の形は地球で見慣れた形態とは似ても似つかないかもしれない、というホイルのメッセージが良くわかり共感した。

最近、私は市民向けあるいは小中高の生徒向けに、宇宙人の話を良くする。そのとき強調するのは、たった5億年前には我々の先祖は魚みたいな生物だったということである。地球は出来てから46億年ほどたっている。宇宙は誕生以来137億年だ。すると我々が遭遇する宇宙人が5億年進化が進んでいたり、遅れていたりすることは十分ありうる話だ。もし、宇宙人が我々より5億年進化が進んでいたら？彼らから見て我々は魚程度だ。魚は人間を理解できるだろうか？おそらく、できまい。すると仮に5億年進化の進んだ宇宙人が地球に来て、魚が人間に遭遇するようなもので、我々は全く理解できないだろう。宇宙生命は我々の想像をはるかに超えた形をしているかもしれないのだ。ホイルの「暗黒星雲」はそういう可能性をSFという形で分かり易く教えてくれたのだと思う。

